

日本沈没

—— 映画文学人生論

原作：小松左京 (1973年) 「光文社」

監督：森谷司郎 (1973年) 脚本：橋本忍

出演：田所雄介博士 小林桂樹 撮影：村井博 木村大作

山本総理 丹波哲郎 音楽：佐藤勝

小野寺俊夫 藤岡弘

阿部玲子 いしだあゆみ

一日も早く日本を逃げ出すんだ

事実は小説よりも奇なり。

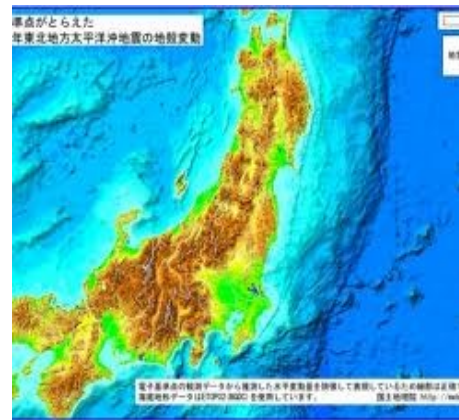
たとえば、小松左京の荒唐無稽なSF小説『日本沈没』では、一九七〇年に第二次関東大震災が起こり、マグニチュードは八・五、津波の高さは最大十五メートルだ。

登場人物の一人で地球物理学者の権威田所博士は言った。「一つの地震によって放出される地震のエネルギーの最大値は、地殻の性質によって、マグニチュード八・六を越えることはない」と。

博士が護衛艦「たかつき」に乗船している時、次の訓電が入った。「関東地方に大規模な地震が起こりました。——震源地は東京湾の沖合、三十キロの地点、マグニチュード八・五、・・・東京湾、相模湾沿岸一帯は津波におそわれ、東京都内は、震度六ないし七の烈震または激震により、かなりの被害が発生した模様です」。

たしかに、その地震の規模は田所博士の想定範囲内だったが、その後、二〇一一年に起こった東日本大震災のマグニチュードは八・九、津波の高さは最大四十・四メートル。博士の想定外だった。また、東日本大震災では福島原子力発電所の被害による影響が問題になったが、小説では原発被害については言及されていない。

幸いなことに、二〇一一年には日本沈没にまでは至らなかった。その点に関しては、小説は事実



日本沈没

映画文学人生論

実より奇なりだ。ただし、今すぐではないにしても、日本列島が海底に沈む可能性はある。

日本海溝沿いの地下のマントル対流の様相が急激に変わりつつあり、場合によっては日本列島が壊滅するかもしれないという田所博士の予言の科学的根拠は、私の頭では理解できないが、ヴェゲナーの大陸漂移説にはうなづけるものがある。

森谷司郎監督の映画『日本沈没』は、最初に世界地図を示し、ヴェゲナーの大陸漂移説について説明している。南北両大陸は、白亜紀以降、ヨーロッパ、アフリカ地域からはなれて、西へむかって移動したという仮説。

途方もない仮説だが、説得力がある。もし大陸が長い時間をかけて移動するなら、日本列島がいつか沈没するような地殻変動があっても不思議ではない。

どうすればよいか。地震や津波の多い日本で暮らすのは危険だ。「一日も早く日本を逃げ出すんだ」というすすめにしたがいたくなるが、狭い地球のどこへ移り住んでもたいして変わりはないという気分もある。

首相は日本の未来についての大概案を三人の学者に提出させた。その案の一つは「このままなんもせんがよい」だった。無責任のようだが、私もそう思う。運がよければ誰かが生き残るだろう。

水底に沈んだ平家蟹の爪